内村鑑三の世界観と Shakespeare の人間観

（中の六）

前　田　利　雄

Hamlet の「汚れた正義」

㈣ Hamlet の的外れ (hamartia — missing the mark)

恩恵をうけた Hamlet が恩恵によって彼の意志は百発百中するのである。この意味で恩恵と的当ての imagery の関係を明らかにする必要がある。的外れは神の恩恵を体験しないときの，人のあり余る力，ありすぎる意志の狙いの狂いから生じるからである。それでは的外れとそれと密なる関係のある "blunted purpose" 及び的中（恩恵）と密なる関係のある sharp purpose についてのべてみよう。

憎悪に狂った Hamlet の意図は「殆んどなまくらにされていたのである」("almost blunted")。しかし "blunted" とは剣に関していうことばであって，Grebanier のいうように，ナイフがなまくらにされるのは使わないことからでなく使い過ぎから生じるのである。

> ... How do our knives become blunted? From too little or too much use? Certainly, as every housewife could tell, from overuse. The Ghost accuses Hamlet *not of having done too little but of having done far too much.* He is referring not to his son's mental attitude, but specially to the murder of Polonius—an act which, by excessive use of his sword, has blunted the edge of Hamlet's revenge: To recapitulate: Hamlet asks, Do you come to chide me because I have allowed my emotions to put fetters on my revenge? The Ghost replies, *Yes, you have dulled the blade of vengeance by your thoughtless use of your sword.*[1]

Grebanier の的を射た説明によって明らかなように，Hamlet は復讐の行為を何もしない程その意図に最初から欠けているのでなくて，復讐に余りにもはやりすぎて，その鋭い刃をめくら滅法にふりまわしすぎ，的を外しぎてなまくらにしてしまったのである。従ってその訳出は *blunted* という過去詞の受身の意をくんでいなくてはならない。何故なら，Shakespeare 自身が blunt (adj.) (=having a thick edge, not sharp) と blunt (v.) (=to dull the edge of, to repress, to weaken, impair) の区別を明日にしているからである。

blunt (=not sharp) の用例は，

thy (love's) edge should *blunter* be than appetite
(*Sonnet* 56. 2)

as *blunt* as the fencers' foils (*Ado* V. 2. 13)

No doubt the murderous knife was dull and *blunt*
Till it was whetted on thy stone-hard heart,
(*R3*, IV. 4. 227–8)

a sharp wit matched with *too blunt a will: whose edge hath power to cut*, whose will still wills it should none spare that come within his power.
(*Love's Labour's Lost*, II. 49)

「鈍くする」という意味の用例では，

blunt the sharpest intents (*Sonnet*, 157. 7)

blunt his natural edge (*Measure for Measure*, I. 4. 60)

Be this the whetstone of your sword: let grief
Convert to anger; *blunt* not the heart, enrage it.
(*Macbeth*, IV. iii. 227–8)

He was but as the cuckoo is in June,
Heard, not regarded; seen, but with such eyes,
As, sick and *blunted* with community,
Affords no extraordinary gaze,
Such as is bent on sun-like majesty
When it shines seldom in admiring eyes;
(*Henry IV, Pt. I.* III. ii. 75–80)

blunted とは従って鈍くされたという受動の意があることがわかる。とすると，"thy almost *blunted* purpose" とは，「余りに使いすぎて鈍くした意図」とか「的外れのめくらめっぽうの切りこみをしすぎてなまくらにした意図の刃」と訳さなくてはならない。しかし日本の学者達の訳をみると，*blunted* を blunt (=not sharp) と解しているか又は自動詞「鈍ったる」に訳していて何が原因でなまったのかわからない。列挙してみると，

「汝(そち)が鈍(なま)ったる決心(こころざし)」(坪内逍遙，中央公論社，166 頁)
「なんじの鈍(にぶ)り勝(が)ちな志」(市河三喜，岩波文庫，114 頁)
「その鈍った心」(福田恆存，新潮文庫，118 頁)
「おまえのほとんど鈍ってしまった目的」(本多顕彰，角川文庫，132 頁)
「汝(なんじ)の大方鈍(にぶ)りかけた意志」(大山俊一，日本文社文庫，162 頁)

これらの訳はすべて *Hamlet* の真意をよく解さず，全体の精神をよく把握していないことから生じた誤りである。*blunted* の一字には深い意味がこもっている。それは Hamlet 劇の本

質を解く鍵をにぎっている言葉であるからである。自分の正義の剣によって復讐の的を射抜こうとする努力は例外なく自分の志の刃を的外れの盲滅法の滅多打ちによってせっかくの鋭意をくじかれ，進むべき方向を失って立往生する。Hamlet のみならず，Claudius も Laertes もすべて自己を神として自分の行為によって自己を確立しようとして，その目的の刃をかいてしまった悲劇の人物である。*blunted* とはこのような深い象徴的な意味をもっているのである。そしてこの blunted とは行動においては立往生して行動がとれなくなくなる（行動がとれないいうのでなく）状態で表象される。すなわち的外れの結果生じる行動なのである。*Hamlet* にはこの miss-the mark-imagery がいたるところに見出される。

blunted purpose は miss-the-mark の imagery と深い関係をもっている。自分の意志の矢が正しい方向に放たれたときに限って，目的を達し矢の切先をいためることはないが，もしそうでなく，意志の剣が的を外れた，無駄な当て方を数多く繰り返すと，その剣の鋭い刃はなまくらになるからである。従って言語の imagery のみならず，行動の imagery においても「的外れ（ハマルテイア）」(hamartia＝missing the mark) はしばしば「鈍（にぶ）くされた意志」又は「鈍刀にされた意志」の imagery と関聯して作品のテーマのもつ意味を運んでいる。

"miss the mark" とはギリシア語の hamartiano である。Liddel and Scott の *Greek-English Lexicon* によれば，hamartiano とはとくに槍を投げるときの的外れを指すとかいてある。"miss the mark, esp. of a spear thrown." そしてもう一つの意味はこの最初の意味から発生して "fail of one's purpose, go wrong," "fail to do, neglect," そして更には "do wrong, err, sin" という意味になる。新約の神に対する罪はこの hamartiano から生じた名詞形 hamartia である。「的を外す」から「目的に達しない」「行動しない，怠る」そして「悪をなす，罪を犯す」という深い象徴的意味の一聯が新約の hamartiano であり，またその思想を背景にした Shakespeare の *blunted purpose* である。従って blunted purpose とは的を外すことから行動をとらないこと，立往生するという意味まで含む。Shakespeare は的外れとそれと関聯して意志と行動の中間に止まって何もしない人間の内心の分裂に *Hamlet* において何度も言及しているのはこのためである。例を Pyrrhus が Priam を殺す場面を誦した役者のせりふをとって考えてみよう。Bradley によれば，この役者の暗誦は Hecuba が殺された夫 Priam に対してあらわした悲嘆が Hamlet の眠りゆく義務感と羞恥心を刺激したこと[2] に意味があるといっているが，しかし，これは表面の意味にすぎない。Bradley は深い象徴的比喩を見落している。

Pyrrhus の一節は Shakespeare の Hamlet 劇の全体の縮図である。それは Shakespeare がその原作を改作して，Hamlet 劇の基調に変容さしたことからでも意図的になされたことがわかる。Nash と Marlowe の共同の原作 *Dido, Queen of Carthage* は主人公 Pyrrhus を暴君的な殺人者，神々を畏れない残忍な人間としているが，しかし主人公に人間的な面を残している。Shakespeare はあたかも「地獄からぬけ出たかの如く」("as though out of hell") Pyrrhus を改作して描いている。したがって Shakespeare の Pyrrhus は狂暴によって激情のとりことなって自制心を失った悪魔さながらである。これは原作にはないのである。†

多くの批評家は Hamlet が Hecuba の悲嘆をみて自己の無行動の不甲斐なさを責めたことに注意を注いだ。Bradley はその代表である。†† しかし劇の進行上，きわめて大切な点を従

† Eleanor Prosser: *Hamlet & Revenge*, p. 154. 参考.

†† The emotion shown by the player in reciting the speech which tells of Hecuba's grief for her slaughtered husb and awakes into burning life the slumbering sense of duty and shame, He must act. (Bradley: Shakespearean Tragedy, p. 131)

来の批評家はみおとしてきた。それはこの Pyrrhus Speech で Hamlet が芝居を思いついたことである。B. Grebanier[3] や Dover Wilson[4] はこのことに気づいた人である。有名な Lawrence Olivier の Hamlet 映画ではこの肝心な Pyrrhus Speech を省略した。Olivier は Hamlet 劇の有機的構造を破壊したのである。しかし Pyrrhus Speech で最も大切な意味はこの一節の含む劇の全体的象徴性である。最近の批評家もやっと気がついてきたのである。Shakespeare は意識的にこの Speech に象徴性を含ませている。それは Pyrrhus と Priam の立場の関係は比喩的には誰と誰であるのかという問題である。

Pyrrhus の立場を Claudius としてみる説 (Roy Walker,[5] G.R. Elliott[6]), Pyrrhus は Hamlet であるという説 (Leonora Brodwin,[7] Eleanor Prosser,[8] R.L. Cox[9]), Pyrrhus は Claudius であり，また Hamlet であるという説 (Kenneth Muir[10]) にわかたれる。しかしこれは K. Muir のいうように Pyrrhus は Claudius と Hamlet の二つを指すものである。Gonzago 殺しで彼を殺さんとする Lucianus は Gonzago の弟 (Claudius) でなく，彼の甥 Lucianus (Hamlet) である。しかし同時に Lucianus やはり Claudius である。*Gonzago* (King Hamlet) を殺した Lucianus は Claudius 自身であるといわんばかりに，王殺しと同じ筋の芳居をみせて彼の良心をつくと同時に，Gonzago (Claudius) の命を狙うものはその甥 Lucianus (Hamlet) であるといって，Claudius を恐怖におとしこむ心理作戦である。「地獄の Pyrrhus」は不吉な木馬に身をひそめて，その目論見も地獄同然黒くのろわれていて，ひそかに Troy の王を殺さんとした如く，Claudius もひそかに Hamlet 王を毒殺した。しかしこの Pyrrhus のよろいは黒いように，Hamlet も黒い服を着て，互いに夜の黒さにひとしい悪い憎悪にとりつかれている。

従って Pyrrhus を Claudius ととっても Hamlet ととっても物の半面として正しいのである。しかしいずれにせよ，Pyrrhus=Claudius ととる人の欠点は兄の命を狙う Claudius を Priam めがけて殺到する Pyrrhus のように「悪魔」「非人間的」ととるのはよいとして，Pyrrhus の剣が敵の頭上にふりかざされたまま立ちどまっている行動の意味をみおとしている。それは Claudius の良心のうめきなのである。これは Claudius を悪魔扱いにしすぎていることから生じた見落しである。又 Pyrrhus を Hamlet とする人々の分析は核心に触れているが，重大な点を一つ見落している。それは的を外れた Pyrrhus の剣の大刀風で Troy の城楼がおちる比喩である。これは R.L. Cox が Ilium を Denmark にたとえている以外は批評家によって何も言及されていない。この Ilium の落城は Hamlet の悲劇において重大な役割りを演じる副役なのである。では一対それは何を意味するのか。それでは Pyrrhus Speech を分析してみよう。

With eyes like carbuncles, the hellish Pyrrhus
Old grandsire Priam seeks. Anon he finds him
Striking too short at Greeks; his antique sword,
Rebellious to his arm, lies where it falls,
Repugnant to his command. Unequal match'd,
Pyrrhus at Priam drives; *in rage strikes wide;*
But *with the whiff and wind of his fell sword*
The unnerved father falls. Then senseless Ilium,
Seeming to feel this blow, with flaming top
Stoops to his base, and with a hideous crash

Takes prisoner Pyrrhus' ear: for lo! his sword,
Which was declining on the milky head.
Of reverened Priam, *seem'd i' the air to stick;*
So, as a painted tyrant, Pyrrhus stood,
And like a neutral to his will and matter,
Did nothing. (II. ii. 494–512)

Pyrrhus は狂暴のため理性をとりこにされて，盲滅法に剣をふりまわして老いた Priam をめがけて切りかかる。しかし激情のため，狙いが狂って的を遠くに空を切る (*in rage strikes wide.*)。しかし老王 Priam の「古風で趣のある名剣」は「彼の命令に反発的であり」「彼の腕に叛逆的である」ため，逆に剣がのびないで手前を切るのみで足許におちとしまう (*Striking too short*)。Pyrrhus は血気にはやって，「すさまじい大刀風」("the whiff and wind of his fell sword") とともに剣を大きく空振りさせるのみであるが，そのすさまじさに圧倒された老王は思わず力つきてどっと倒れる。感情もない Ilium の城楼は自分の王が倒れたその空の一撃を感じたものか，もえさかる尖塔もろとも地面まで大音響をたててどうと倒れ，Pyrrhus の耳をつんざく。すると Pyrrhus の剣は白髪の頭の上高くじっとかかげられたまま，まるで大気につき刺ささったかの如くに動かない。まるで絵にかいた暴君のように，Pyrrhus は立往生のまま，何もしないで彼の意志とその実現の中間に位してそのどちらにもつかずの様子で立止まっていた ("blunted purpose")。

Shakespeare が「ハーケニアの虎のように」("like a Hyrcanian beast") (砂漠の虎のこと) といいかけて，すぐそれをすてて "he, whose *sable* arm, *Black* as his purpose, did *the night* resemble" といって後者をとったのは「地獄の Pyrrhus」("hellish Pyrrhus") の着込んだ鎧もその肚も夜の暗闇に似て真黒い色と憎悪にととりつかれていた点を強調して原作との違いを明確にするためである。不吉な木馬にひそんで人々の欺むいてひそかに町に火を放った彼の全身の黒装束はやがて人の血で真赤に頭から足許までぬりつぶされる。Troy の人々の父，母，娘，息子達の血がもえる街の熱気で凝固して Pyrrhus の全身をおおうのである。これは芝居という見世物で王を欺むいて，ねずみとりに誘い込んだ Hamlet が「黒い喪服」("a suit of sables") を着て，地獄とすでに結託して悪魔的な力に支配されていることとよく似ている。その上彼はその黒い悪魔の服を Elsinore 城内の父，母，娘，息子の血，Polonius, Gertrude, Ophelia, Laertes, Rosencrantz, Guildenstern の血でぬりつぶすからである。昔の批評家のいうように，何もしないでいる点で Pyrrhus と Hamlet は似ているというような的外れの解釈はもはや適用しないのである。

The rugged Pyrrhus, like the Hyrcanian beast—
'tis not so, it begins with Pyrrhus:—
The rugged Pyrrhus, he, whose sable arm,
Black as his purpose, did the night resemble
When he lay couched in the ominous horse,
Hath now this dread and black complexion smear'd
With heraldry more dismal; head to foot
Now is he total gules; horridly tricked
With blood of fathers, mothers, daughters, sons,
Bak'd and impasted with the parching streets,

That lend a tyrranous and damned light
To their vile murders: (481–92)

「残忍な大刀のすさまじいうなり声」のみたてて，無闇に空を切って的を外す Pyrrhus すなわち Hamlet はこの Pyrrhus の一節をきいて，何もなし得ぬ自分に恥じて，復讐にもえる。その激情の中で思いついた芝居の実演の狙いは Claudius が魂をうたれて衆人の前で自分の罪を告白するように彼の良心をつかまえることであった。しかし芝居の途中で彼のはやりすぎた行き過ぎが却って王を警戒させて，罪の告白寸前まで追いつめながら，Polonius の機転「芝居をやめろ」の一大音響によってとりにがしてしまう。Priam すなわち Claudius は Hamlet の「空砲の音で驚いて」(“frighted with false fire”)† 立ち上ったのである。そして理性を失なった王のうけた一撃に，Polonius までもその一撃を感じたかのように，共に立ち上って大声を発する。Ilium の城楼は Cox のいう Denmark ではなく，Polonius である。†† Ilium は主人 Priam の危急をみて大音響をたてて自ら倒れることによって Pyrrhus の剣を空中に固定する。Polonius も大声を立てて主人 Claudius の告白を防ぐ。しかも Polonius

---

† *false fire* とは「実弾のこめていない，火薬のみつめた鉄砲の空を打つ射撃」(“harmless discharge of a gun loaded with powder only”) (*The Kittredge Shakespeares Hamlet*, New York, 1939, p. 229) である．Kittredge はその用例を二つ引用している．Cf. Gosson, *Apology for The School of Abuse:* When I spare not to greet with a false fire’: Defoe, *Captain Singleton*, 1720, We saw Lions and Tigers, and Leopards every Night and Morning in Abundance; ... if they offer’d to come near us, we made false Fire with any Gun that was uncharged, and they would walk off as soon as they saw Flash;

それにもかかわらず，日本の学者達の訳は文字通りに取り，「火」又は「烽火(のろし)」ととっている．

「偽(うそ)の火(ひ)を怖しう思うてか！」(坪内逍遙)

「風声(ふうせい)かくれいでびくついたか！」(市河三喜)

(研究社の市河氏の注をみると『false fire, i.e. mere fiction.「風聲鶴唳(かくれい)」，原の意味はいつわりの烽火.』とある.)

「え，偽の烽火(のろし)におびえたのか！」(本多顕彰)

正しい訳は大山俊一氏の「空(から)の鉄砲でカッカきたか」(旺文社文庫) である．しかし「鉄砲」よりもむしろ「大砲」が原意に近いと思う．それは Claudius の権力誇示のための大砲による空射撃を風刺しているからである．

この劇の悲劇は to miss the mark という原意の hamartiano からきた名詞形 hamartia (= tragic flaw とか sin とかに訳せる) すなわち「悲劇的欠陥」又はキリスト教の「罪」を最大の関心事としている．従って，剣や大砲の的を射るとか的を外れるとかという hit or miss the mark の imagery が充満している．Pyrrhus の剣の「大刀風」で Priam が倒れるように，Claudius も Hamlet の放つ「空砲の爆発音」によっておどろくのである．これを「烽火」と訳すと，もはや *hit or miss the mark* の imagery の有機体的劇組織を破壊することになるのである．どうして我国の学者は近視眼的であるのか．世界観をもって深く事相を洞察できないのか．

†† Roger L. Cox はその驚嘆すべき洞察と分析によって Pyrrhus が後の Hamlet に，Priam は Claudius にあたることを説いているが，Ilium は Denmark にあたるといった．私は R. L. Cox の分析に全くの賛意を表する．しかし Ilium が Denmark に匹敵するという考えには同意しかねる．これは先にのべし如く，私の分析では Polonius である．Ilium の城や街路は自分達の「父，母，息子，娘達」のりくに呪うべき明りをかしたとある．これは Polonius の娘 Ophelia や息子 Laertes の死を指すように思える．Polonius は暴君的であり，彼の出しやばりさが自分の子供達の死を招いたからである．もう一つの理由は Denmark はその主人(あるじ) Claudius の崩壊寸前のとき彼に同情を表しないのに反し，Polonius は主君 Claudius の運命の傾きに対して心を痛めているからである．それは主人 Priam が Pyrrhus のねらい外れた一撃に倒れたとき，その一撃を感じて自らも倒れた Ilium に似ているからである．Hamlet が祈る Claudius の外見に欺むかれて形のみの剣の抜き (的外れ) で終ったとき Polonius はその王の苦しみの原因をさぐらんとして，女王の室の垂れ幕の中で Ilium の塔の如くつつ立って敵 Hamlet の言動をさぐっていた．そのとき危害を加える意志の全くない Hamlet の剣幕 (Pyrrhus の空を切った大刀風) に驚いた Gertrude の叫び声に自らも一撃をくらった如くうろたえて叫び声を出したために Claudius と間違えた Hamlet の一撃 (的外れ) に倒れたことは Ilium に全くよく似ている．

が King Hamlet 殺しの共犯者であったことを考えると,† Polonius が Claudius に対して抱いていた彼の感情がどんなものであったかは想像がつく。芝居で Hamlet が Gonzago 殺しの説明をしたとき，すでに Polonius は Hamlet の芝居の肚を見抜っていたのである。主人 Claudius の罪の暴露は同時に自分の罪の暴露であり，自己の運命の終りである。芝居の雰囲気に不安を感じる Claudius に Hamlet は激情にまかせてねじをひねりすぎた答えを与えた

---

† Polonius は Claudius が王となるために多大の犠牲をもった臣下である．すなわち Polonius が Hamlet の父の殺害の計画のお膳立てをしたのである．このことを証するものはこの作品に多い．上の芝居の中止の命令もその一ツである．もう一つはねずみとりの芝居によって明白に Hamlet が殺害の秘密を知っていることがわかったあとで，Claudius は Polonius を Gertrude の垂れ幕の背後にかくして母と子の会話をきくことを許したことである．そこでは Hamlet が母に殺害について語ることは必至であることを Claudius はしっているにもかかわらず，どうして Polonius の耳にそれをきかせることを許したのか．これは Polonius がすでに殺害についてしっていることを意味するのである．Polonius にとって何も新しい情報ではないのである．Polonius 自らが Claudius と同じく殺害の共犯であるからこそ，用心深い Claudius が自分の安全を Polonius に託したのである．もう一つの証拠は狂った Ophelia が Claudius に fennel（ういきよう—へつらいを象徴する），columbine（おだまき—姦通をあらわす），*rue*（ヘンルーダ—悲しみを意味する）を与えることである．何故に Claudius に rue（ヘンルーダ）を渡したか．それは彼が姦通者であったことと人殺しであったから，悲しい記憶を味わねばならないから．Ophelia は正気のときには口にしてはいけないことを，狂った今空気にさらしたのである．このことは兄や父が彼女ならきかれても大丈夫という気持から，Gertrude の姦通や先王の殺害のことなどを彼女の耳のきこえるところで話し合っているのを Ophelia がもれきいていたことを示す．Polonius がその犯罪をしっていたということは，とりもなおさず彼が共犯者であったからに外ならない．

これが Claudius をして Polonius の如き老道化に対して忍耐の緒を切らさず，気長につきあいをさせている理由である．このことを言葉においても証するものが多い．Grebanier 先生の引用を更に引用すれば Laertes に Claudius は全宮廷の人々の前で Denmark 王室と Polonius の関係は頭とハート，手と口の関係よりも深いつながりと献身の関係にあることをのべている．

> The head is not more native to the heart,
> The hand more instrumental to the mouth,
> Than is the throne of Denmark to thy father.
> (I. ii. 47–)

知性ある Claudius と愚かとみえる家来の関係としては上の賛辞は大げさすぎると Grebanier はのべている．また後には Polonius に彼はいう．

> Thou still has been the father of good news.
> (II. ii. 42)

Hamlet との交際を Ophelia に禁じたことを忠実そうにのべる Polonius はその途中で Claudius から自己の評価を求める．

> Pol. What do you think of me?
> King. As of a man faithful and honorable. (II. ii. 129–30)

そして再度，

> Pol. Hath there been such a time—I'd fain know that—
> That I have positively said, "'Tis so,"
> When it proved otherwise?
> King. Not that I know. (II. ii. 153–)

これらの言葉は何故に Claudius が Polonius の気に入ろうとしているかという疑問なげかける．しかしこれらの Polonius の言葉が Claudius をして彼に対して恩があることを思い出させていることを考えると，上の事情も理解できると Grebanier はのべている．

更にもう一つの動かない証明は狂った Ophelia の花の配布によって彼女が Queen と King の姦通と King Hamlet の Claudius による殺害についてしっているという事実である．B. Grebanier: (*The Heart of Hamlet*, p. 237) Polonius が殺害の共犯であることを主張する学者は Grebanier の他に，

> R. Limberger, *Polonius* (Berlin, 1908)
> E. Reichel, "Polonius" in *Magazin* für Literatur LXIX (Feb. 10 and Feb. 17, 1900), pp. 163–6; 179–82.
> (Grebanier, p. 301)

があるという．この殺害共犯者 Polonius の項は全面的に B. Grebanier の名著 *The Heart of Hamlet*, pp. 236–8 に負った．

ために王も Polonius も自分達がわなにかけられたことを直感する。

> Ham.　ねずみとり。比喩ですよ。この劇はウィーン（デンマークではありません）でおこった殺害をもとにしたものです。ゴンザゴ（ハムレット王ではありません）は公爵の名前，彼の妻バプティスタ（ガートルードではありません）。すぐおわかりになると思いますが，これは悪漢じみた作品です。しかしそれが何んですか。陛下や私達は心にやましいものをもっていませんでしょう。痛いところはない筈です。すねに傷ある馬がはね上れ，こっちの背はすり傷なしですよ。

次いで甥の Lucianus が毒をもって登場，Polonius は Lucianus のせりふをきいたとき，王が感じた以上に自分自身の悪の投影をその中にみたことは間違いない。

> Luci.　Thoughts black, hands apt, drugs fit and time agreeing;
> Confederate seasone, *else no creature seeing*.

「誰もみていない」筈であったのに，誰かが自分の「黒い思い，応じる手，毒薬」を王にお膳立てしたことをしっているのだと Polonius は恐怖でおののいたに違いない。王が立ち上ると同時に，Polonius も立ち上って芝居に中止を命じて王が告白するのを防いだのはこのためである。

> Oph.　The king rises.
> Ham.　What! frighted with false fire?
> Queen.　How fares my lord?
> Pol.　Give over the play.
> King.　Give me some light: away!
> All.　Lights, lights, lights!
> [*Exeunt all except* Hamlet *and* Horatio.]
> (III. ii. 281-6)

この場の King と Polonius の立場は Troy の落城の場面の Priam と Ilium の立場を思い出させる。王と王の住む宮廷の運命の関係は不即不離であるように，Claudius と Polonius の運命の関係も，頭が心と血縁関係にあるよりも親しく，手が口の補助者であるよりも献身的な関係である。この Priam と Ilium の関係の pattern をこの場面よりももう少しあとの祈りの scene と closet scene においてもう一度より明白にみることができる。それは「空の大砲のとどろきにおどろいた」Claudius が良心を打たれて神に自己の罪を告白しようと試みて地に伏す場面である。Pantomime でもしこの場面をみれば，祈らんとする王の背後で Hamlet の剣が殺気をはらんで音もなく鞘走り，そのまま王の頭上で狙いがつけられたかと思うと，まるで絵にかいた暴君さながら，憎悪にとりつかれ目は殺りくの想像で血走り，しかし地獄の剣は空中につっ立ったように動きもせず，一撃は今あるべきか否か（=To be or not to be）で精心の分裂で苦しみつつ，果ては何もしないでそのまま再び剣を元の鞘に収める。と同時に王は頑固な膝を屈して，天使の力をかりて祈らんとして一層地に伏してとりもちにかかった小鳥の如く悪のとりもちから身をふりちぎらんとする。そしてそれにつづく次の場面では，Polonius

が王の心の一撃を感じて，あたかも自己の運命の切迫をしったかの如く，Gertrude の室で差し迫る末路から主人を救おうとして垂れ幕の陰にかくれたが，地獄の Pyrrhus さながらの Hamlet の言葉の剣に度胆を抜かれ Gertrude ともども大声をあげて（Ilium の城楼の倒れおちる大音響の如く），そのために一層激情に狂った暴君の手練の早業の一撃をうけてどっと血煙りを立てて倒れる。

for lo! his sword,
Which was declining on the milky head
Of reverened Priam, seem'd i' the air to sticl;
So, as a painted tyrant, Pyrrhus stood,
And like a neutral to his will and matter,
Did nothing. (II. ii. 507–512)

Ham. Now might I do it pat, now he is praying;
And now I'll do it: and so he goes to heaven;
And so am I reveng'd. That wonld be scann'd:
A villain kills my father: and for that,
I, his sole so, do this same villain send
To heaven.
Why, this is hire and salary, not revenge.
...
Up, sword, and know thou a more horrid hent;
(III. iii. 73–88)

憎悪にかられて判断をくもらされた Hamlet は Claudius の祈りは表面のみのことで，霊において神とのつながりは全くなかったのを見ぬけなかった。Hamlet の剣は狙が外れて，的を遠くに空を打ったのである。剣は空しく音をたてて帰る。もう一つの空を切る imagery を忘れてはならない。

Hamlet が自分の理性をあそばせてそれに黴（かび）を生えさせたことを恥じて，自己を（只食い，眠るだけの）野獣にすぎないことを反省している。

What is a man,
If his chief good and market of his time
Be but to sleep and feed? a beast, no more.
Sure he that made us with such discourse,
Looking before and after, gave us not
That capability and god-like reason
To fust in us unus'd. (IV. iv. 33–9)

しかし自己の激情力で打つ大刀が的外れであるように，自分の力によって「神に似た理性」—信仰—を得ることも同じく的外れになり，いつまでも自己発見ができないのである。自分が

どうしてこうも遅滞しているのか，それがわからないのである。

I do not know
Why yet I live to say 'This thing's to do';
Sith I have cause, and will and strength and means
To do't. (IV. iv. 43–6)

この Pyrrhus と Hamlet の遅滞はしかし R.L. Cox が鋭く指摘しているように，行動しないことから生じているのでなくて，行動を取ったけれどもそれが的を外れていることから生じている。

> Hamlet's delay comes about not because he consistently fails to act, but because his actions utterly miss the mark.[12]

Pyrrhus の剣は大刀風強く Priam めがけて突撃するが，すべて狙いが遠くに外れるのである。理由は狂暴のために手評が狂うのである。Hamlet の剣も最初の亡霊の出現ときにも，祈る Claudius に出会ったときにも鞘走る。すなわち亡霊の言葉の正直さを証明するために，芝居を試みる（王として衆人の前で罪の告白をさせようとした狙いは外れた)。母の室では彼の短兵急な剣は垂れ幕の背後の人物を王と間違えて血を吸う。母の室では彼の言葉の剣が Gertrude の心を真二つに割ってしまう。Hamlet の剣は休む暇なく血を求めて走りすぎている。しかしすべて Hamlet の剣の突きは狙いが外れている。理由は憎悪にかられているためである。すべて *blunted purpose* とは盲滅法の滅多切りによって生じた意志の刃の鈍りであって，行動しない状態からくる性格的鈍り（blunt will）ではないのである。Pyrrhus の立往生について「意志」と「無意志」の葛藤とはいわないで，「意志と実現の中間に立ち止まる」といっているのはこのためである。「やる気のない鈍い意志」(*blunt* purpose) でなく，「やる気充分ありすぎて失敗の行動をとりすぎて鋭さを失ってしまった意志」("*blunted* purpose") といっているのである。a neutral to his will and matter† (=fulfilment) とは従ってわかり易くいえば，的に当てようと努力すればする程，実現されるものは的外ればかりである。自分の欲する的の射抜き (his will) はこれをなさず，自分の欲しない的外れのみが実現 ("matter") される。私 (Pyrrhus) は一対どうしたらよいのかという内心の分裂である。意志に対しても又実現されることに対してもうみつかれて無関心になってしまった態度 ('neutral')†† をとらざるを得ないというのである。そして Pyrrhus の欲しない的外れをなさしめる者は一対誰であるか。それは彼の「怒り」("rage") であると Pyrrhus は答えることは間違いない。Hamlet が Pyrrhus に代って自分の苦衷を語っているからである。では Hamlet の場合はどうであろうか，

---

† "His will" means "his purpose", "his matter", "the accomplishment of his purpose." As a neutral stands between two parties, so Pyrrhus paused midway between his purpose and its fulfilment. (*The Kittredge Shakespeares Hamlet*, New York, 1939, p. 199)

†† *Shorter Oxford English Dictionary* によると neutral (adj.) 1. Of rulers, states, etc.: *Not assisting either party* in the case of a war between other states 1549. 2. *Taking neither side in a dispute; indifferent* 1551. belonging to neither party or side 1564. とある．とすれば意志にもその実現にも無関心又はどちらをも助けない，というのである．

Hamlet も Pyrrhus のこの内心の分裂を更に深刻に経験している。その例証は Laertes への謝罪に最もよくあらわれている。彼の欲する行為 (hit the mark) をなし得ないで，彼の欲しない行為 (miss the mark) をとってしまう葛藤である。彼の欲しない行為をなさしめるのはでは一対誰であろうか。Hamlet はいう，それは Hamlet 自身でなく，彼の狂気 (madness) であると，従って彼の狂気が彼の矢を無思慮にも屋根越しに射させて誤って兄弟を傷つけたのである (I have shot mine *arrow* o'er the house, And *hurt* my brother)。ここにも miss-the-mark の Imagery が明白にみえる。

> What I have done
> That might your nature, honor, and exception
> Roughly awake, I here proclaim was *madness.*
> Was't Hamlet wrong'd Laertes? Never Hamlet:
> If Hamlet from himself be ta'en away,
> *And when he's not himself does wrong Laertes,*
> *Then Hamlet does it not;* Hamlet denies it.
> Who does it then? His *madness.* If 't be so,
> Hamlet is of the faction that is wrong'd;
> His madness is poor Hamlet's enemy.
> Sir, in this audience,
> *Let my disclaiming from a purpos'd evil*
> Free me so far in your most generous thoughts,
> That *I have shot mine arrow o'er the house,*
> *And hurt my brother.* (V. ii. 244–258)

彼の狂気 (madness)† が矢を射て，それが誤って——悪意でなく ('from a purpos'd evil') ——兄弟を傷つけたというのである。それは彼の狂気であって，決して彼 (Hamlet) 自身ではない。R.L. Cox はその画期的名著 *Between Earth and Heaven* で，上の Hamlet の告白はロマ書7章の Paul の告白に類似する点をのべて，Paul のいう罪にあたるギリシヤ語の hamartia は Hamlet の狂気 ("madness") にあたるという。[13] 何故ならば，Hamlet の狂気は的を外すということであり，それが Paul のいう「肉体に宿る罪」('the sin which dwells within him') に相当するからであるという。Cox の引用した Hamlet の告白と Paul のそれをここに引用して比べてみればそれは明らかとなるであろう。

> If Hamlet from himself be ta'en away,
> And when he's not himself does wrong Laertes,
> Then Hamlet does it not, Hamlet denies it.
> Who does it then? His madness.

> Now if I do what do not want, it is no longer I that do it, but sin which dwells within me. (Rom. 7: 20)

† ここでいう madness とは激情の意であって，決して精神病の狂気をさしているのではない．Shakespeare は *mad* を使ってしばしば人が狂暴に走る激情をあらわしている．

洞察力ある Roger L. Cox 先生の引用の文はたしかに Shakespeare が Paul のロマ書を熟読していて，これを作品全体の精神の基調にしていたことを証する。何故ならば Paul の欲する道徳的善はこれをなさず，彼の欲せざる道徳的悪はこれをなす内心の分裂は，そのまま Hamlet の内心の分裂に応用をみているからである。従って私は Cox の上の比較に霊感を得て，Hamlet の分裂した人格を次のようにいえば一層 Paul 的であり同時に Hamlet 的であろうと思う。その前に Paul の言を引用しよう。

> I can will what is right, but I cannot do it. For I do not do the good I want, but the evil I do not want is what I do. ... If I do what I do not want, it is no longer I that do it, but the sin which dwells within me. (Romans: 7. 15–17)

「私は正しいことを欲しいるが，私はそれをなし得ない。私の欲することをなし得ず，私の欲しない悪をなす。私の欲せぬことをなすものは私でなくて私の肉体に宿る罪である。」という Paul の言葉は Hamlet 的にいいかえると，私は正しく矢を射らんと欲するけれども，私はいつも的を逸(そら)す。私の射ぬきたい的はこれを射ず，私の射ぬきたくはない的はこれを射る。私が射ぬきたくない的を射ぬいているならば，それをなすのは私でなく，私の内に宿る狂気である。英語でいうならば

> It is no longer I that shot mine arrow o'er the house and hurt my brother but my madness which "sits on brood o'er something in my soul." 又は
> It is no longer I that broke down "the pales and forts of reason" and hurt my brother but "some vicious mole of nature" in me.

となるであろう。

Hamlet の罪は Claudius の罪とは違うように人は考える。確かに Hamlet は Claudius のようにと姦通や殺人を犯してはいない。しかし神の目からみれ両者は変らない立場にある。すなわち二人とも各自の野心と情熱の的を自分の力の矢で射とめようとしている点である。深く Shakespeare をよまんとするものはそれに気づくのである。Claudius を従来の批評家や Hamlet 自身は悪漢とみなしているが全くの誤りである。Claudius も Hamlet とひとしく悪によってでなく人としての弱さのために罪を犯したのである。Hamlet が彼の力の矢——狂気（激情）——によって復讐の的を射んとして Polonius という誤った的を当てたとき，Claudius は自分の力の矢（形式的祈り）によって神の的を射んとして自分を射てしまうのである。「私の矢は大変うなりの激しい風には余り華奢な作りでできているので私の弓に再にもどってきて，私の狙ったところにはとんでゆかなかったであろう。」(my arrows, Too slightly timber'd for so loud a wind, Would have reverted to my bow again And not where I had aim'd them.) すなわち Claudius は狂暴のため的を外す Pyrrhus である。

> O! my offence is rank, it smells to heaven;
> It hath the primal eldest curse upon't;
> A brother's murder! Pray can I not,
> *Though inclination be as sharp as will:*
> *My stronger guilt defeats my strong intent;*
> *And like a man to double business bound,*

I stand in pause where I shall first begin
And both neglect. (III. iii. 36–43)

彼の罪の悪臭の矢は天の怒りの的を射た。それを消すためには彼は祈りの矢をもって天父の愛の的を射なくてはならない。彼の祈りへの衝動（"inclination"）は彼の決意と同じ程に鋭い刃をもつものであるが，彼は祈ることができない。何故なら彼の犯した罪の硬さが祈らんとする彼の意志の鋼の硬さよりもかたく強いので，祈りたい意志の刀は彼の罪のかたき岩を砕こことができないどころか，刃をぼろぼろにかいてしまう。彼は祈りの矢を射て天の的を貫ぬこうとするが，それができない。彼の欲しないところの地の思いが彼をとらえる。祈り，告白，後悔と矢つぎ早に矢を天に向って射るが矢はいつも自己に帰ってくる。王冠，野心，女王への執着という自己の欲せぬものが矢を自己につき戻す。二つの仕事にしばられた人と同じくどちらを先になすべきかに迷って立止まり両方とも怠ってしまう。天に放った祈りの矢はこの世の欲をはらんだ風のためにもとの弓に帰ってきて地につきたつ。彼が欲しないところのものをなすならば，それをなすのは Claudius でなくて，Claudius の犯した罪（"stronger guilt"）である。彼の犯した過去の罪が彼の祈りの矢じりを砕いて鈍くするのである。Shakespeare の Paul 的思想を彼の言葉でもって表現しても Shakespeare は否定しないであろう。It is no longer Claudius that have made his arrows "revert to (his) bow again and not where (he) had aim'd them" but his "stronger guilt"—"the sins of ambition and lust that (has) still corrupted him."

彼の祈りを妨げるものは彼の犯した罪の恐ろしさではない。罪によって得た罪の果に対する貪(むさぼ)りが彼の心を今もって腐らせ，彼の心を地にしばりつけ，彼の思念を神の義の愛に向けさせないのである。すなわちそれは王冠への野心と女王に対する肉慾的愛である。そして彼の殺人の動機は王冠よりもむしろ Gertrude に対する愛であったことを思うとき，「星が自分の運行の軌道をはなれて動けないように，私も彼女の側をはなれて行動できない」といった Claudius の愛の矢が神の愛に飛んでいかないのは極めて自然である。しかしもっと深く考えると，Claudius の今の罪の快楽が彼の祈りを妨げているのではなくて，女王の愛の快楽を維持するためには更に将来において罪を犯さなくてはならない悪の道である。それは Hamlet 殺しである。更に罪を重ねるためには神への悔改めは邪魔になるのである。神そのものが今の罪の喜びの邪魔になるのである。彼の祈りの言葉そのものがその矛盾をあらわしている。

That cannot be, since I am still possess'd
Of those effects for which I did the murder,
My crown, mine own ambition, and my queen.
May one be pardon'd and retain the offence?
(III. iii. 53–6)

神に罪を赦されることはその罪を捨てることであると Claudius の頭の計算は働く。罪のゆるしよりもその結果今の罪の快楽の放棄の方が関心事となっている。これは罪を犯したものが後悔して神に赦されたいと願う真実な魂の声でない。罪を赦されることを第一に願う者は罪の苦しさにあえぎ，罪にさいなやまされる精神の苦痛から解き放たれたいと神に願う。しかし Claudius はその罪の悲哀は神に対するものはよりも自分自身に対するものである。従って自

分の罪の赦しの願望はあるけれども，徹底したものでなく，それよりも罪の赦しの結果すなわち今までの罪の快楽に対する放棄の方がより大きい関心事となる。"May one be pardon'd and retain the offence?"（「赦されてしかも罪をそのままもってよいいのか」）retain the offence はむしろ not give up the offence（罪を断念しなくてもよいのか）と解してよい。神の恩恵にはその力があると Claudius は暗闇に光りをみつけたように希望を点じてすがりつく。

Where to serves mercy
But to confront the visage of offence?
And what's in prayer but this two-fold force,
To be forestalled, ere we come to fall,
Or pardon'd, being down? (III. iii. 46–50)

とすれば神を見上げて神の愛と恩恵を仰げばよいのだ。

Then' I'll look up;
My fault is past.

しかし人間の良心と自分自身に対する悲しみに出発する彼の祈りは神に接近しない。神との交わりが全く断絶している。ここから形式（form）と人間の行為（策謀）に最後の砦を築いて，神に接近しようとする。

But O! what *form of prayer*
Can serve my turn? 'Forgive me my foul murder'?
That cannot be; *sinee I am still possess'd*
Of those effects for which I did the murder,
My crown, mine own ambition, and my queen?

彼が人の行為によって神に近づくには，彼が今楽しんでいる「王冠と野心と女王」を断念しなくてはならない。だがこれは自分の生命である。とするとあとに残る手段はともかく後悔のみである。後悔に不可能なるものはない。

what then? what rests?
Try what repentance can: what can it not?

だが彼の後悔も「自分の罪に対する自己嫌悪」("self-displeas'd For self-offence") (Measure for Measure) にすぎない。後悔（メタノイア）とは心の方向が90度回転することである。自己が中心である Claudius には，Hamlet と同じく，神の的を射ぬくことができない。自己にあくまで執着して自己の力で後悔せんともがくほど，益々自己の罪とその思いに沈潜してゆく自分のみを見出す。Claudius は自己のあがきを鳥もちにひつかかった小鳥の羽ばたきにたとえている。

O wretched state! O bosom black as death!

O limed soul, that struggling to be free
Art more engaged! Help, angels! make assay;
(III. iii. 67–69)

彼の祈りの矢は天にとどかない。それは地獄の Pyrrhus や激情の Hamlet の剣と同じく，的外れの無駄打ちにすぎなかった。Claudius は屈した膝よりたちあがって，次の言葉でそれを示している。

My words fly up, my thoughts remain below:
Words without thoughts never to heaven go.
(III. iii. 97–8)

「天に達する」(" to heaven go ") という言葉は Claudius の天に向けての空の大砲の発射を思い出させる。Claudius ほど天に向けて空砲をとどろかせてその権威を誇示する王はいない。結婚式のとき，Hamlet が気嫌よく Denmark にとどまることを承諾したとき，丸で天の心を射当てたかの如く空砲を打つ。

in grace whereof,
No jocund health that Denmark drinks to-day,
But *the great cannon to the clouds shall tell,*
And the king's rouse the heavens shall bruit again
Re-speaking earthly thunder. (I. ii. 123–8)

次は Hamlet と Laertes の撃剣の試合のとき，Hamlet が最初の又は第二回目の打ち (hit) をあてるならば，城壁の大砲はすべて天に向かって射撃を開始せよという命令を出す。

If Hamlet give the first or second hit
Or quit in answer of the third exchange,
Let all the battlements their ordnance fire;
...
And let the kettle to the trumpet speak,
The trumpet to the cannoner without;
The cannons to the heavens, ... (V. ii. 289–91)

この二度も天を的にする Claudius の大砲打ちはしかし彼の傲慢さのために狙いが狂ってしまう。それは彼の最初の目当ての Hamlet の Denmark 滞在が逆に自分の命を狙う結果に終り，二回目は Hamlet を fencing で狙わんとしたが，逆に Hamlet が Laertes に最初の hit を与えるのみならず，最後には Claudius 自身の生命が Hamlet の剣の的になったことによって実際に証明される。action の imagery のみならず，すでにのべた如く言葉の imagery においても Claudius は二度 miss-the mark の imagery を使っている。一度は Polonius の死の責任を人が自分や Gertrude に問わないように，計画するときに使う。この夫婦は賢明な

友達をよんで起った事について話しをすれば，「大砲が的に向かって進むと同じ確かな狙いをもって世界を最長距離で横切って，中傷のささやきは毒矢をとばしても王や女王の名を射抜くこともなく，あたるとしても傷つかぬ大気位なものであろう」という。

slander,
Whose whisper o'er the world's diameter,
As level as the *cannon to the blank*
Transports his poison'd *shot*, may *miss our name*,
And hit the woundless air. (IV. i. 40–44)

王は神によって塗油をぬられた人 "the Anointed" であるという考えが Claudius にある。「神が王を守る垣根をめぐらしてくれるので，反逆は自分のしたいことをのぞきみすることができても，そのしたいことを行動に移すことはできない」("There's such divinity doth hedge a king, That treason can but peep to what it would, Acts little of his will") (IV. V. 123–5). しかし王の権勢と傲慢がちっぽけな，束の間の権威を身に着ても，それは怒れる猿とひとしく，天使を欺かす愚かな事を演ずるのみである。彼の大砲が天にとどいて天を打ち当てないように，彼の心が神の恩恵を射止めない限り，彼が王として世間の中傷の矢から免れることはない。また彼が Hamlet を罰して，彼を愛する世間の人々に逆らえば，彼の射る矢は逆にそれを飛ばしたもとの弦に返ってきて彼の狙う相手にあたらないで，彼自身 (Claudius) にはね返ってくるであろう。

so that my *arrows*,
To slightly timber'd for so loud a wind,
Would have *reverted to my bow* again,
And not where I had aim'd them. (IV. vii. 21–4)

Claudius の祈の失敗は彼が何もしなかったのでなく，告白，祈り，後悔と無駄であっても行動を試みたけれども，それらがすべて的外れであったことを意味する。神の恩恵を斥けたのでなく，神の恩恵の的を射止めようと必死のあがきを何度も試みたのである。鋭い Eleanor Prosser はこの点の洞察を欠いて，Claudius は恩恵を斥けたといったが，これは間違っている。

> He has honestly diagnosed the cancer that is destroying him, but has consciously refused the only medicine that could heal him. Because he has brought all the evil out into the open but has deliberately rejected grace, he is doubly damned.[14]

Claudius が Prosser のいうように恩恵を得ようとしなかったというのは，劇の終りで Claudius が Hamlet を射止めようとしなかったということとひとしく，テクストの事実に反する。撃剣の scene で Claudius があらゆる術策をろうして Hamlet を撃ち当てようとした如く，祈りの scene でも Claudius は神の的を射ぬこうとした。そして海の旅の後の Hamlet は恩恵を身に着けたから，最後の scene の Hamlet を仕止めることは恩恵の的を射ぬくこと

にひとしい。すべて祈りの時と同じく，人の策謀と智略によって Hamlet をわなにかけようとする。しかし祈りの scene と同じく人の考える形式や行為によって神の恩恵が得られなかったように，Hamlet という恩恵の体得者を打ち果たすことができない。それに反し恩恵を着た Hamlet は無策無謀で試合（プレイ）（＝芝居）にとびこんで，「手ごたえのある一本」（"a hit, a very palpable hit"）を先取する。Hamlet は恩恵によって初めて的を射たのである。彼が自分の技倆をけんそんしなくてはならぬ程のすばらしい腕前の剣士 Laertes に対して一本の打ちを得たのである。(I'll be your foil, Laertes; in mine ignorance Your skill shall, like a star i' the darkest night, Stick fiery off indeed.) (V. ii. 267–271)。そしてこの自己の剣の腕前に対する謙遜はそれまでの Hamlet の激情にかられてなした的外れを意味しないであろうか。ともかく彼は人の策を脱ぎすてて，神の恩恵の道具となって，敵の策略がその「実演」（"performance"）を通してぼろをみせる機会のある毎に，敵の奸計の裏をかいて復の的を当ててゆく。Laertes の裸の毒剣は Hamlet の腕に傷をつける。しかし彼は敵の剣をたたきおとして自分の剣と交かんして，敵の毒剣で敵を倒す。敵の良心は的をつかれて，王の奸計をあばく。Hamlet の恩恵の剣は今や全き良心をもって王を刺しつらぬく。王子の魂は今や天使の合唱に守られて天に向う。Hamlet は神の従順の器として天の恩恵の的を射たのである。そこに従順の王子 Fortinbras がポーランドの凱旋から帰ってくる。Hamlet の死をとむらう Fortinbras は兵士に大砲を打つことを命ずる。Hamlet の魂の矢は天を射たのである。

Go, bid the soldiers shoot.

これが Hamlet 劇の最後の言葉でもある。従順の王子 Fortinbras が恩恵の王子 Hamlet の門出を祝福することの意味を考えるとき，この言葉は一層象徴性をましてくる。的外れ（ハマルテイア）は恩恵によってのみ的当りに変えることを深く示唆しているのである。それでは次回は Shakespeare の恩恵について論じてゆきたい。

(51. 11. 29（月）稿)

References

1. Bernard Grebanier, *The Heart of Hamlet* (New York, 1967), p. 233.
2. A.C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (New York, 1967), p. 131.
3. B. Grebanier, *op. cit.*, pp. 202–3.
4. Dover Wilson, *What happens in Hamlet* (Cambridge, 1964), p. 141.
5. Roy Walker, *The Time Is Out Of Joint* (London, 1941), pp. 67–68.
6. G.R. Elliott, *Scourge and Minister* (New York, 1965), pp. 62–63.
7. Leonora Brodwin, *Shakespeare's Hamlet* (New York, 1964), p. 37.
8. Eleanor Prosser, *Hamlet & Revenge* (Stanford, 1971), pp. 154–5.
9. R.L. Cox, *Between Earth and Heaven* (New York, 1967), pp. 53–59.
10. Kenneth Muir, *Hamlet* (New York, 1963), pp. 32–33.
11. R.L. Cox, *op, cit.*, p. 55.
12. *Ibid.*, p. 58.
13. *Ibid.*, pp. 57–58.
14. Eleanor Prosser, *op. cit.*, p. 186.

(原稿用紙60枚，51年11月完，西岡の里にて)